

## 老年看護学実習における学内演習方法の教育効果

(その2) 文献抄読演習の役立ちと学びの広がり

古城 幸子\*・木下 香織

新見公立大学看護学部

(2014年11月19日受理)

A大学看護学部では、老年看護学の臨地実習を認知症高齢者グループホームで実施している。実習施設での学生受け入れの事情に配慮し、週1回学内演習を取り入れている。本研究では、学内演習でおこなっている文献抄読の役立ちと教育効果を明らかにすることが目的である。老年看護学実習を体験した64名を対象に、学生への質問紙調査と学内演習記録の分析を行なった。質問紙調査では(1)文献選択の理由と(2)文献抄読の演習評価を4件法で回答を求めた。演習に対する評価の平均は4点中3.1点であった。学生個々の関心による文献の選択は多様であった。グループホームという限られた実習の場においては、直接役立ち感は少なかったが、文献抄読演習の評価は高く、視野の広がりへの教育効果は得られた。

(キーワード) 老年看護学実習, 学内演習, 文献抄読, 教育効果

### はじめに

文献抄読を用いた教育方法の多くは、看護研究に関連して、先行研究を批判的に読むクリティークとして演習されることが多い。臨床現場においても、文献検索を実施する動機は研究をする目的で行われている。しかし、研究で蓄積された多くの知的財産は、次の研究課題を提示するために存在するのではない。黒田<sup>1)</sup>は、単に研究の目的でクリティークするのではなく、看護実践の中に還元していくことが重要だと述べている。また、山川らは<sup>2)</sup>クリティークの目的の一つに知識の獲得を挙げている。10年前に常識だったことが今では非常識になっていることも少なくない。老年看護学領域では、特に2000年の介護保険制度の施行以来、多くの看護研究者・実践者が高齢者ケアに関する研究に取り組んできた。日本老年看護学会の学会状況をみると、2000年の第5回学術集会<sup>3)</sup>では、84題の報告であったが、第10回<sup>4)</sup>では122題、第19回<sup>5)</sup>は198題と年々報告数が増加しており、新しい考え方やエビデンスが示されている。

A大学看護学部においては、2013年度から老年看護学実習の学内演習として文献抄読演習を実施している。今回、その演習の教育効果を評価することを目的に調査を行った。

### 1 研究方法

#### 1. 学内演習の内容

大学看護学部では老年看護学の臨地実習を認知症高齢者グループホームで実施している。実習施設での学生受け入れの事情に配慮し、週1回の学内演習を取り入れている<sup>6)</sup>。演習内容は、ルーブリック評価指標を用いた実習体験の振り返りと、老年看護学に関連した研究論文の抄読など複数の内容を組み合わせている。

#### 1) 文献抄読の方法

3年次後期からの領域実習開始前オリエンテーションにおいて、3年次の夏休み前に演習課題の提示を実施する。その説明で、高齢者に関する研究論文を1編検索することが課題である。たとえば、高齢者虐待、高齢者の意思決定、ターミナルケア、認知症高齢者、介護家族の負担感、特別養護老人ホームの看護の役割など、各自の関心のあるテーマで検索する。該当論文は研究誌、学会誌等に掲載されているものとした。テキスト、商業雑誌、会議録、インターネットの情報は該当しないこと、論文の著者の研究領域や研究の蓄積についても確認しておくことが望ましいことも加えて伝えている。

#### 2) 演習方法

週1回の学内演習時に、学生2~3名と教員1名で60~90分の時間を使用して、学生が検索した文献を抄読する。選択した学生がレジメを用意し、文献の紹介をし、その後内容について熟読する。研究結果から得られたこと、結果を現場で活用できるか、課題は何かなどについて話し合う。

#### 2. 調査方法

##### 1) 調査対象

\*連絡先: 古城幸子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

A 大学看護学部 64 名を対象にした。3 年次後期に老年看護学実習を体験した 32 名と 4 年次前期に体験した 32 名である。

2) 調査時期

3 年後期の実習体験者には 2014 年 1 月、4 年前期の実習体験者には 2014 年 7 月に調査した。

3) 調査方法

学生への質問紙調査と選択した文献の分析を行った。学生への調査は、2014 年 1 月に独自に作成した調査用紙を用いた。64 名に配布し、48 名から回答が得られた (回収率 75.0%)。

4) 調査内容と分析方法

質問紙は<実習への役立ち><演習の学び><研究活動への役立ち><演習方法の評価>の計 18 項目について“大変そう思う”“まあそう思う”“あまり思わない”“思わない”の 4 件法で回答を求め、項目ごとに単純集計した。学内演習記録は、64 名の学生が提出した 128 枚の記録から、実習への役立ち等に焦点を当て分析した。またルーブリック評価において、抄読文献の内容を示すキーワードとの関連性を見た。

5) 倫理的配慮

調査依頼の際に、研究の目的、自由意思による参加、記述内容や研究への協力の可否は成績には関係しないことを紙面と口頭で説明した。調査用紙は無記名とし、データは統計的に処理する。記入された調査用紙は、添付した封筒に入れ、封をして回収箱にて回収した。回答の提出により同意が得られたと判断することを説明した。また、本研究は新見公立大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

II 結果

1. 学生の選択した文献

課題として学生の提出した文献は、重複したものを省いて 60 件であった (資料参照)。論文が発行された年度をみると (図 1)、1993 年から 2013 年までのもので、2003

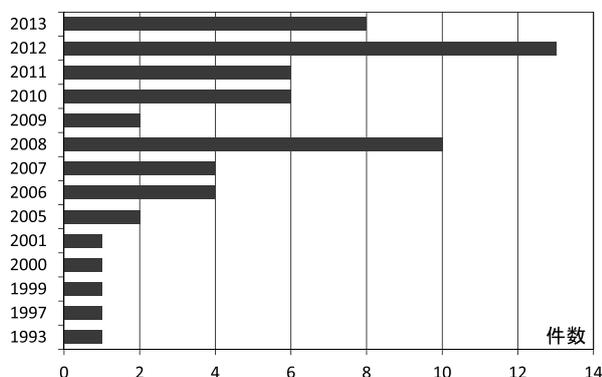


図 1 文献の発行年

年からの過去 10 年間の文献が 55 件 (91.7%) でほとんど 10 年以内の文献であった。そのうち 2009 年からの過去 5 年間の文献が 33 件で、全体の半数 55.0% を占めた。検索方法は、医学中央雑誌、CiNii、最新看護索引などのネットでのキーワード検索し、オープンアクセスや学内図書館で手に入れることができるものがほとんどであった。

2. 調査結果から

1) 文献選択の理由 (表 1)

表 1 文献選択の理由 n=48 (複数回答)

1) 老年看護学の授業	19人
2) 今までの実習体験	8人
3) 個人的な体験	16人
4) 卒業研究テーマの関連	11人
5) 卒業研究の方法に関連	2人
6) その他	4人

文献の選択理由を複数回答で求めた。講義を通して関心を持ったという回答が最も多く 19 人、個人的な体験が 16 人、卒業研究のテーマとの関連が 11 人、実習体験が 8 人などであった。学生の背景は、祖父母との同居経験のある学生が 31 名 (48.4%) 祖父母とよく話す学生は 38 名 (59.4%)、高齢者施設等でのボランティア経験のある学生は 21 名 (32.8%) である。学生の祖父母は 60 歳から 70 歳前半の年齢で、健康で日常生活を送っている人が多い。

2) 演習効果に関する質問 (表 2)

表 2 質問内容と評価の平均 n=48

<b>・実習への役立ち</b>	<b>2.97</b>
1) 実習の疑問を解決できる内容であった。	2.8
2) 実習に役立つ内容であった。	3.0
3) 自己の老年看護観に影響を与える内容であった。	3.1
<b>・文献抄読演習による学び</b>	<b>3.2</b>
1) 高齢者の特徴への理解が深まった。	3.4
2) 認知症高齢者についての理解が深まった。	3.0
3) 高齢者ケアの方法について理解が深まった。	3.1
4) 高齢者ケアの新しい考え方や知識を知った。	3.2
5) 老年看護学への関心が深まった。	3.3
<b>・研究活動への役立ち</b>	<b>2.82</b>
1) 今後の研究活動に役立つ内容であった。	2.7
2) 研究テーマの設定がわかった。	2.7
3) 研究方法の示し方がわかった。	2.7
4) 研究結果の示し方がわかった。	2.9
5) 文献の使い方がわかった。	2.9
6) 批判的に読むことの大切さがわかった。	3.0
<b>・文献抄読演習の方法</b>	<b>3.4</b>
1) 自分は文献抄読演習に積極的に参加できた。	3.3
2) グループメンバーとの学びが共有できた。	3.4
3) 文献抄読にふさわしい時間をかけて行われた。	3.3
4) 教員の意見や助言が参考になった。	3.6

①実習への役立ち

実習への役立ちの平均評価は2.97で、「実習に役立つ内容であった」が3.0、「自己の老年看護観に影響を与える内容であった」が3.1であった。「実習の疑問を解決できる内容であった」は2.8であった。

②文献抄読演習による学び

文献抄読演習による学びの平均評価は3.2、どの質問にも3.0以上の回答が得られた。「高齢者の特徴への理解が深まった」3.4と最も高く、「老年看護学への関心が深まった」3.3、「高齢者ケアへの新しい考え方や知識を知った」3.2、「高齢者ケアの方法について理解が深まった」3.1などであった。

③研究活動への役立ち

研究活動への役立ちでは、平均評価は2.82で、「批判的に読むことの大切さがわかった」が3.0で最も高く、他の質問では2.7~2.9とやや低い結果となった。

④文献抄読演習の方法

文献抄読演習の方法については3.4で、どの質問も3.3

を超えていた。特に、「教員の意見や助言が参考になった」が3.6で最も高く、「グループメンバーとの学びが共有できた」3.4などであった。

3. 抄読文献とルーブリック評価表との関連(表3)

実習目標に沿ったルーブリック評価表と学生が選択した文献のキーワードを関連付けて概観した。表3に示すように、レベル1~3の評価の深度に合わせてキーワードをゴシック体で示した。抄読文献は、ルーブリックに示す実習目標の1~9およびレベル1~3において学びの多くを網羅する内容であった。文献キーワードが多く示されたのは、「4. 高齢者の健康問題と生活機能に視点を置いた専門職の援助過程を理解する」「5. 高齢者のQOLとそのゴールを理解する」で、学生の関心も高く、文献も検索しやすいタイトルであったと思われる。また、「1. 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する」や、「3. 高齢者の生活の場を理解する」の目標に関連した文献も多かった。

不足していたのは、「2. 高齢者の健康と生活にかかわる問題について総合的に理解する」「6. 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する」と「8. 高齢

表3 実習目標のとルーブリック評価 レベル1~3内のゴシックが抄読文献の内容を示すキーワード

スケール	1. 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する	2. 高齢者の健康と生活に関する問題について総合的に理解する	3. 高齢者の生活の場を理解する	4. 高齢者の健康問題と生活機能に視点を置いた専門職の援助過程を理解する	5. 高齢者のQOLとそのゴールを理解する	6. 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する	7. 高齢者の諸問題に関わる看護の役割と機能、および他職種との連携を理解する	8. 高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的文化的な環境を理解する	9. 学習の結果と今後の課題を明確にする
レベル1	・身体的、精神的、社会的側面での老いに伴う喪失が理解できる 要介護状態 栄養と運動 口腔衛生と健康	・身体的、精神的、社会的な老いの過程が理解できる 転倒の状況	・グループホームなど高齢者関連施設の利用者の生活の場が理解できる 生活環境 同居高齢者	・生活障害によるADL低下のある高齢者の支援が理解できる ADL セルフケア 認知症のADL アルツハイマー 脳血管性認知症	・日々の生活における高齢者の楽しみが理解できる 個々の高齢者のQOLについて理解できる QOL 生きがい おしやれへの関心 セルフケア	・過去から現在、そして未来の高齢者の身体・非身体像が理解できる ・健康から虚弱、疾病、回復のサイクルの中で、老年看護の専門性が理解できる ・リスクマネジメント上の重要性が理解できる ・倫理的ジレンマを表現できる	・生活歴や職歴、教育歴など高齢者の個人的な文化が理解できる 団塊の世代	・自己の老年期のイメージを明確にできる 看護師の感情	
レベル2	・個々の高齢者の価値観を知り、個性と多様性が理解できる ・高齢者にとっての家族の存在やその支援が理解できる 家族介護者 介護負担 家族の看取り支援	・疾病やADLの低下による生活障害がアセスメントできる ADLのアセスメント 転倒要因	・生活の場における高齢者のなじみの関係が理解できる 環境の変化 「社会的な場」としての生活の場が理解できる	・個別的な援助や対応の重要性が理解できる ・認知症高齢者への関わり方とコミュニケーションの重要性が理解できる 認知症 認知症患者の意思決定 動物介在療法	・個々の高齢者のQOLに影響を与える要因が理解できる 生きがいの要因 おしやれへの動機づけ QOLへの影響要因	・価値観や人生観が個々の生活背景から形づくられていることが理解できる 生きる意味 生への価値観 死への態度	・リスクマネジメントへの対応ができる 感染症と管理 ・倫理的な課題を専門的な視点で理解できる 虐待・虐待予防 介護負担	・方言や風習など、高齢者の生活する地域の文化が理解できる 看護観 死生観	
レベル3	・さまざまな経験に基づいた知恵や力をもつ存在であることが理解できる 意思決定 アドボカイト ・人生の先輩としての高齢者を敬い、尊重できる	・高齢者の抱える生活上の課題とその支援の方向性が理解できる 介護予防 健康増進	・高齢者の生活の場の移行が理解できる 終の棲家 自己決定 適応 在宅ケア 呼び寄せ ・高齢者関連施設の果たす役割と機能が理解できる 看取り家族介護 高齢者介護施設	・高齢者との援助的人間関係が理解できる ・自尊感情を支える援助の重要性が理解できる ・医療依存度の高い高齢者への看護について理解できる 自尊感情 認知症への対応 DM ギヤチェンジへの支援 がん看護 終末期医療	・個々の高齢者のQOLを高めるための支援と実践ができる スピリチュアリティ 主観的QOL評価とアプローチ	・高齢者の人生と生活に深くかかわる家族や地域社会の存在が理解できる 家族関係 コーピング 孫と祖父母	・保健・医療・福祉に関わる他の専門職との連携と協働が理解できる 職種間連携 コーピング ・老年看護に関わる社会資源の活用や地域のサポートシステムが理解できる	・戦争などの社会的変動から、高齢者の人生に影響を与えた歴史的な文化が理解できる ・高齢社会の課題を理解し、看護の役割と機能について自己の考えを明確にできる 保健師の役割 看取りへの訪問看護師の課題 老年看護観 バーンアウト	

者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する」であった。

### III 考察

学生個々の関心による論文選択で多様なテーマを抄読することになった。選択の理由は、講義の中で関心を持ったテーマが多かった。学生の背景からも、個人的体験の中での高齢者問題への認識は低いと考えられる。“虐待”“寝たきり”“家族介護”“自殺”などの過酷な高齢者の現状は、講義をとおして理解し、関心を持っていることが推察された。実習体験は2年次に2週間の基礎看護学実習Ⅱの体験であるが、高齢者の受け持ち対象が多いものの、看護過程を学ぶ実習目標への視点が強いこともあり、高齢者の関心は高くないことが分かった。

提出された文献は、過去5年間の文献が約半数で、最近の研究論文を検索できていた。多くは、容易に手に入るオープンアクセスの文献であったが、原著論文が主に抽出できていたことは、研究成果をエビデンスとして活用できることの理解につながると考えられる。

文献抄読という演習方法に関しては、評価は高かったものの、実習への役立ちについて評価がやや低かった。それは認知症や施設に関連した論文の選択が少なかったことが影響している。課題の提示が実習開始前であり、実習中の困難を解決するための文献選択にはなっていないためである。しかし、実習では見えにくい家族の課題や在宅ケアなどへの視点が広がる文献や、高齢者ケアに必要なQOL、看取りなどの問題提起された文献もあり、自己の老年看護観を深めることにはつながった。

実習評価としてのループリックで学びを見ると、不足していた内容が明らかになった。目標2については、高齢者理解の基本的な内容であることから、文献としては抽出されにくい内容で、テキストや参考文献での知識の定着が必要となる。目標6については、高齢者の人生を捉える視点が必要であること、目標8では文化的・歴史的な理解といういずれも看護分野での文献が少ないことも影響していたと思われる。課題提示の際に、原著および看護文献を検索することを説明しているが、医学中央雑誌だけでなく医療以外の社会学分野などへの関心も広げるような説明をする必要がある。

老年看護学実習の学内演習での文献抄読演習の教育効果は、演習そのものへの学びが得られ、実践への役立ちにつながるといった効果は少なかった。鈴木ら<sup>7)</sup>は、教養演習に文献抄読を用いて学習効果を見ているが、学生自身の思考や価値観の問い直しから、問題への向かい方が変化し、学ぶ楽しさを経験していると述べている。このように、新しい研究成果を知り批判的に読み解くことで、今実際に体験していることの振り返りや、課題解決の方

法を考える機会ともなり得る。

学生たちが卒業後の現場で直面する課題を、その解決の糸口を先行文献から見出すという方法を、この文献抄読演習の中で身につけることができれば、老年看護学だけでなく、より有意義な演習となると考えられる。また、1年間の試みであり、今後の学生の取り組みにおいて、さらに教育効果を具体的に評価することが課題である。

本研究は、日本看護学教育学会第24回学術集会において発表した内容に、加筆修正を加えたものである。

### 文献

- 1) 黒田裕子：黒田裕子の看護研究 Step by Step 第4版。学研、2012。
- 2) 山川みやえ、牧本清子：よく分かる看護研究論文のクリティーク。日本看護協会出版会、2014。
- 3) 日本老年看護学会第5回学術集会抄録集、2000。
- 4) 日本老年看護学会第10回学術集会抄録集、2005。
- 5) 日本老年看護学会第19回学術集会抄録集、2014。
- 6) 古城幸子、木下香織：老年看護学実習の教育評価にループリック評価表を導入して。新見公立大学紀要、34.15-20、2013。
- 7) 鈴木啓子、伊礼優、平上久美子：文献抄読を用いた教養演習授業における看護学生の学びの分析。名桜大学総合研究、20、77-83、2011。

老年看護学実習における学内演習方法の教育効果

資料

著者	文献テーマ	出典	巻号	pp	発刊年
鈴木みずえ他	高齢者の転倒状況と転倒後の身体的変化に関する調査研究	日本看護科学会誌	13(2)	10~19	1993
佐瀬真粧美	老人保健施設への入所に関わる老人の自己決定に関する研究	老年看護学	2(1)	87~96	1997
近森栄子	在宅ケアを提供される高齢者の特性と家族の負担感との関係	神戸市看護大学紀要	3	101~112	1999
赤嶺依子他	高齢者の末期癌告知に関する研究	日本看護学会-老人看護-	31	102~104	2000
金森雅夫他	痴呆性老人デイケアでの動物介在療法の試みとその評価方法に関する研究	日本老年医学会雑誌	38(5)	659~664	2001
野村千文	「高齢者の生きがい」の概念分析	日本看護科学会誌	25(3)	61~66	2005
沼田加代他	山間過疎地における高齢者の転倒と関連する運動実態	群馬保健学紀要	26	27~34	2005
菊池雅彦	高齢者の口腔衛生と全身の健康との関連	東北歯誌	25	51~64	2006
石塚敦子他	施設入所高齢者のおしゃれへの関心と動機	順天堂大学 医療看護研究	2(1)	11~16	2006
松田千登勢他	認知症高齢者をケアする看護師の感情	大阪府立大学看護学部紀要	12(1)	85~90	2006
兎澤恵子	高齢者の移住による自尊感情の実態調査	群馬パース大学紀要	3	373~380	2006
小野若菜子他	在宅高齢者を看取る家族を支援した訪問看護師の看護観	日本看護科学会誌	27(2)	34~42	2007
柴田亜樹他	京都府W1における高齢者の食への取り組みのための地域診断結	日本家政学会誌	58(6)	357~362	2007
流石ゆり子他	終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者のQOLとその関連要因	老年看護学	12(1)	87~93	2007
鈴木絵里他	要支援・要介護独居高齢者が生活の中で抱える思い	日本看護学会-老年看護-	38	190~192	2007
佐々木恵他	要介護高齢者における死亡場所の希望と実際	日老医誌	45	622~626	2008
鹿子供宏他肇	アルツハイマー型老年認知症患者を介護する家族の介護負担に関する研	老年精神医学雑誌	19(3)	333~341	2008
村田伸他	在宅高齢者の運動習慣と身体・認知・心理機能との関連	日本在宅ケア学会誌	12(1)	35~43	2008
西村美里他	認知症高齢者に看護学生が抱いた感情	藍野学院紀要	22	11~21	2008
高山直子他	臨牀指針 地域在住高齢者のインフルエンザワクチン状況と接種行動に影響を与える要因	臨牀と研究	85(2)	281~284	2008
仁科聖子他	独居高齢者が在宅で最期を迎えるための訪問看護師の援助	順天堂大学 医療看護研究	4	50~56	2008
小林あずさ他	認知症高齢者にプラスの変化を与えたケア場面における看護師の対応の特徴	群馬パース大学紀要	6	127~133	2008
城内景子他	在宅終末期の看取りに関する家族の満足度について	神戸市看護大学紀要	12	37~43	2008
三浦久幸	高齢者終末期医療と倫理	日本老年医学会雑誌	45(4)	395~397	2008
流石ゆり子他	終末期を介護老人福祉施設で暮らす後期高齢者の気がかり・心配	山梨県立大学看護学部紀要	10	27~34	2008
廣瀬春次他	独居高齢者の生きがいに関する研究	山口県立大学学術情報	2	26~31	2009
石川基樹	高齢者の生きがいの特性-自由記述データの分析から-	人間科学研究	22(1)	1~13	2009
山岸貴子	保健師の支援した高齢者虐待事例の家族関係の特徴とその対応	日本赤十字看護大学紀要	24	104~111	2010
竹田恵子	看護学からみた高齢者への健康生活の支援-人生の最終章を生きる高齢者への看護-	川崎医療福祉学会誌	増刊号	45~55	2010
岡本久子	高齢期の住まい方への援助についての一考察	花園大学社会福祉学部研究紀要	18	161~172	2010
山岸貴子	保健師の支援した高齢者虐待事例の家族関係の特徴とその対応	日本赤十字看護大学紀要	24	104~111	2010
藤江慎二	高齢者虐待対応に困難を感じる援助者の虐待者や被虐待者に対する感情・認識	大妻女子大学人間関係学部紀要	12	99~107	2010
小松紗代子他	孫の育児に参加する祖父母の精神的健康に関する文献的考察	日本公衛誌	57(11)	005~1013	2010
松尾香奈	一般病棟において看護師が体験した認知症高齢者への対応の困難さ	日本赤十字看護大学紀要	25	103~110	2011
内ヶ島伸也他	認知症高齢者の日常生活ケアにかかわる意思決定能力の特徴とその関連要因の検討	北海道医療大学看護福祉学部学会誌	7(1)	13~23	2011
松本啓子他	在宅認知症高齢者の家族介護者の介護経験を通じた思い	看護・保健科学研究誌	11(1)	214~220	2011
松尾香奈	一般病棟において看護師が体験した認知症高齢者への対応の困難さ	日本赤十字看護大学紀要	25	103~110	2011
島田とくよ他	介護施設に入所している認知症高齢者の主観的QOLと客観的QOLの比較	老年看護学	15(1)	31~37	2011

著者	文献テーマ	出典	巻号	pp	発刊年
田口香代子他	高齢者の生への価値観と死に対する態度	昭和女子大学生生活心理研究所紀要	14	57~68	2012
桐野匡史他	在宅家族介護者の介護関連デイリー・ハッスルと介護放任傾向との関係	日保学誌	15(2)	71~80	2012
森一恵他	高齢がん患者の終末期に関する意思決定支援の実際と課題	岩手県立大学看護学部紀要	14	21~32	2012
馬庭留美他	牛乳及び乳製品摂取による高齢者の介護予防効果に関する研究	日農医誌	61(2)	77~87	2012
麻生佳愛他	看護師が認識する介護施設で生活する糖尿病患者を持つ後期高齢者のセルフケアの問題	日本糖尿病教育・看護学会誌	16(2)	133~141	2012
久野真矢他	血管性認知症、アルツハイマー型認知症の認知機能と発達に基づいたADL能力の関連	老年精神医学雑誌	23(7)	837~845	2012
中西康祐他	主観的QOL評価と生活観察をもとにした認知症高齢者へのアプローチ	長野県作業療法士会学術誌	30	120~128	2012
祐野修他	高齢者の転倒と日常生活活動の変化に関する一考察	総合福祉科学研究	3	229~235	2012
江渡文他	手指運動機能評価を高齢者に行う意義—前期高齢者と後期高齢者の比較—	日本作業療法研究学会雑誌	15(1)		2012
小林尚司	介護保険施設における高齢者の看取りに関する文献検討	日本赤十字豊田看護大学紀要	7(1)	65~75	2012
岡田和隆他	自立高齢者における栄養状態と口腔健康状態との関連—第一報：サルコペニア予防プログラム介入前調査として—	老年歯学	27(2)	61~68	2012
橋本翼	高齢者の心理的、精神的健康状態における孫の及ぼす影響	山形保健医療研究	15	21~32	2012
井上美代江他	老年看護学実習における看護学生の認知症高齢者に対する関係形成の過程	聖泉看護学研究	1	73~77	2012
田原育恵他	介護老人福祉施設入所による生活環境変化に適応するための要因	聖泉看護学研究	2	59~67	2013
矢吹知之他	養護者による高齢者虐待の未然防止に向けた予兆察知に関する検討	日本認知症ケア学会誌	11(4)	817~830	2013
福田洋子他	特別養護老人ホームにおける「看取り介護」の現状と課題	高田短期大学紀要	31	49~60	2013
多久島寛孝他	高齢者介護施設における感染管理—管理者への実態調査—	保健科学研究誌	10	25~34	2013
井上美代江他	介護老人福祉施設に入居する要介護高齢者に対する看護学生の援助過程における着眼点	聖泉看護学研究	2	41~49	2013
小山尚美他	中規模病院の一般病棟で認知症高齢者のケアを行う看護師の困難	老年看護学	17(2)	65~73	2013
室屋和子他	配偶者と死別した男性高齢者の心理過程と社会生活への再適応	産業医科大学雑誌	35(3)	241~246	2013
中木里実他	日本人高齢者の死生観に関する研究の現状と課題	四国大学紀要	41	1~10	2013

**Educational effects of campus practice on geriatric nursing  
(Part 2) Learning development of the nursing course students by reading papers related to the elderly's care**

Sachiko KOJO, Kaori KINOSHITA

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

Students in A College of nursing had clinical geriatric nursing practice in the group homes for the elderly with dementia. Because of insufficiency of the practice facilities, the campus practice was carried out once a week. The purpose of this study was to clarify the usefulness and educational effects of reading any papers concerning the care of the elderly for the campus practice. Questionnaires of 64 students who took geriatrics nursing practice were analyzed in terms of the choice of papers and the reading ability of the students. Then the results were evaluated in the grade of four scores. The average score was 3.1 of 4 full points. Many sorts of papers were selected by the student due to a wide range of their interests. These findings indicated that the campus practice was effective for the students having clinical geriatrics nursing practice.

Keywords: geriatric nursing practice, practice on campus, reading of papers, educational effects